SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

技と技との国際交流の現場に立つ : Percussion × Percussion一和と洋、打の響宴一と音楽教育ワークショップ

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子, 大槻, 寛, 松下, 允彦, 北山, 敦康, 志民, 一成 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7167

技と技との国際交流の現場に立つ
Percussion×Percussion―和と洋、打の響宴―と音楽教育ワークショップ

音楽教育講座　小西潤子・大槻寛・松下允彦・北山敦康・志民一成

１．背景

静岡大学とネブラスカ大学オマハ校（以下、UNO）は、長年の姉妹校協定を結んでいる。また、本学教育学部とオマハ校音楽科および美術科は、2004年10月のオマハ校教員ジャズ・コンサートを手始めとし、従来の語学研修に続く1週間の音楽・美術の実技指導からなるArt and Music Programを2005年と2007年に実施し、交流を深めてきた。

今回は、トム・ロランド准教授（打楽器）と学生からなる打楽器演奏グループが来日し、静岡で演奏会を開催することになった。また、オルフ＝シュールヴェルクを導入した音楽教育を実践するメリッサ・バーク准教授（音楽教育）からは、小・中学校教員を対象としたワークショップの申し出があった。そこで、音楽教育講座では演奏会を小西と大槻、音楽教育ワークショップを松下、北山、志民が担当し、それぞれ企画運営を主体的に行った。そして、学生の参加を促し、両校学生の国際交流のための貴重な機会とすることにした。

２．事業概要

２．１　コンサート

本事業は、2008年11月27日（木）19：00より、静岡音楽館AOIホールにて実施した。事業の主催は静岡大学およびUNOとし、静岡市国際交流協会、静岡大学全学同窓会、静岡大学教育学部同窓会の後援、オマハ友の会、株式会社こおろぎ社の協力を得た。楽器の準備や練習がむずかしい打楽器だけのコンサートは県内では珍しく、初心者でも親しめる。しかも、オマハ市と静岡市は姉妹都市であることから、コンサートを入場料無料で一般市民に開放することにした。そして、打楽器アンサンブルの魅力を伝える地域貢献の場とし、学生には演奏の技を媒介とした異文化理解の場を提供することにした。

企画に際しては、教育学研究科修了生・小菅由加里氏に音楽作品の編曲や演目のコーディネートをお願いした。そして、静岡で活躍する打楽器演奏グループ・スティック＆マレットに呼びかけ、合同コンサートとした。スティック＆マレットには日本を代表する作品、UNOにはアメリカの作品を中心にプログラムを組んでもらい、終演は合同演奏とした。

リハーサルでは、本学部学生補助のもとで、会場近隣の森下小学校の生徒が見学に訪れた。≪日本のわらべうた≫では、新井和康、有賀佳衣、小出潤、野田明日香（工学部の小出以外は、音楽科）が、≪マリンバ・スピリチュアル≫では静岡大学和太鼓サークル・龍韻太鼓の有志メンバーの小池美そら、加茂歩、三浦智子（人文学部）の学生がエクストラ出演した。チラシのデザインは、UNOのArt and Music Programに参加した本学部美術科学生・池上加奈子が行った。他にも、多くの学生がコンサート運営や観客として参加し、リアルな国際交流を経験した。

写真１　森下小学校生徒へのミニ・ワークショップ

写真２　≪日本のわらべうた≫演奏に加わる学生

写真３　UNO 打楽器アンサンブルによる演奏

写真４　スティック&マレットによるリハーサル

２．２　音楽教育ワークショップ

本事業は、11 月 29 日（土）14：00～17:00、静岡市産学交流センター（B-nest）にて実施した。平成 20（2008）年度静岡大学公開講座の一貫として位置づけ、教育学部付属教育実践センター主催、UNO 共催、静岡県教育委員会・静岡市教育委員会の後援を得た。メリッサ・バーク准教授のほか、オーストラリア国立ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽芸術大学大学院で同じくオルフ＝シュールヴェルクの考え方を研究した永岡和香子・浜松学院大学短期大学部専任講師に講師を依頼した。永岡講師には日本での実践、バーク准教授にはアメリカでの実践を披露してもらい、和気あいあいとした雰囲気の中で、参加者は童心に帰って言葉を超えた音楽コミュニケーションに浸った。

写真５　永岡講師による実践

写真６　バーク准教授による実践

３．まとめ

国際交流事業の重要性は自明のことであろう。しかしながら、環境や考え方、さまざまな条件の異なるところで生活している者同士が、事前に緊密な情報をやりとりしつつ企画を推進するのは、大変な労力を要する。しかも、コミュニケーションは母語ではない英語で行わねばならない。音楽科としては、これまでの交流によって UNO との信頼関係を築いてきた実績があったので、双方の間の壁の高さをさほど感じなかった。しかし、今回のように外部関係者の協力を得るとなると事情は異なってくる。演奏会もワークショップも、本番が始まるまで不安でなかったといえばウソになる。演奏会に際しては、小菅由加里氏の献身的なご協力をいただいた。ワークショップでは、永岡和香子氏が会場を和ませてくださった。オマハの会からは、両校の交流発展に向けて暖かい励ましのお言葉をいただいた。そのほか、ここにはあげることのできなかった多くの方々に、心から感謝する次第である。